

MCR コースってなに？-受講者の背景とコースの魅力-

薬剤疫学分野(MCR コース受講生) 岩破 將博

本日記では、MCR コースを受講する学生の背景や本コースの特徴や魅力について述べたいと思う。1年間の流れについて興味をお持ちのかたは、平成23年度、24年度のMCR日記を参考にいただければありがたい。おおむね平成25年度のMCRコースも同じようなタイムラインであり、前期は授業やグループワークに忙しく、後期は講義に関してはややゆとりがあるものの課題発表を含めた自身の研究などが中心の生活であった。

平成25年度MCRコース受講生は16名、うちMCRコース専科生は2名であった。MCRコース専科生と受講生の違いは、卒業までの年限(1年か2年以上か)が最大の違いであり、選択できる授業に違いはない。ほかに異なる点は、研究プロトコル・マネジメント法(自身の研究計画をブラッシュアップし、発表する授業)での発表が、専科生は発表・質疑応答あわせて1回あたり90分が持ち時間、受講生は1回あたり45分(1年間に2回発表)という点である(平成25年度の場合)。どちらを選択するかは、自分の研究内容やキャリアプランを考えて選択することになると思うが、聞いた中では1年ではどうしても時間的制約が厳しいという理由で2年以上をすすめる人が多かった。実際1年を過ごしてみて、2年間あったほうが腰を据えて取り組めるように感じる。ただし、博士後期課程を視野に考えておられるのであれば、MCR1年ののち博士後期課程に進学することで、あわせて4年のうちにMPHとDrPHの2つを取得することが可能である。

平成25年度におけるMCR受講生の背景は、おおむね卒後10年目前後で、内科・外科・救急ほか専門診療科はバラエティに富んでいた。受講生の総数は例年と大きく変わらないものの専科生の数は少なかったようだ。授業に関しては、MCR必修科目(前期10コマ/後期2コマ)をベースに興味のある授業を追加・選択し1週間のスケジュールを決定した。その内容は、文献検索から研究のデザイン、解析(医学統計)、系統的レビュー、さらには質的研究や医療経済、医療政策、医薬品開発と幅広い分野を扱っている。私は臨床研究に関わる各種講義と、系統的レビュー、医療政策、医薬品開発の講義を受講し、質的研究や特許・知的財産に関する講義は選択しなかった。おおむね授業には誰かしらMCR受講生が受けており、グループワークで進めていくものもいくつかあるため、自然と顔なじみになっていった。

京都大学の本コースの特徴として、第一に充実した授業が挙げられる。様々な授業が準備されており、臨床研究を進めるうえで必要な内容が網羅されている。ほかの大学院でこれほど授業が充実していることは少ないのではないだろうか。疫学一般のみならず、自身の研究を進めるうえで役に立つ内容も豊富で、多くのことを吸収できるチャンスである。授業内容も前期から後期になるにつれ、総論から各論へ分かれていく構成となっており、1

年間を通して自身の研究を深めていくことができる。また京都大学自体の強みでもあるが、国際的な研究者の来訪が多く、基礎研究を含め特別講義は頻繁に開催されている。オープン参加のものは周知されたで、授業外に興味のある内容の講義は参加することができる。

MCR 限定の授業は、MCR コース受講生である医師しか参加できない。ほかの授業は、SPH(社会健康医学系専攻)全体に対して開かれている。SPH 全体では、他の医療職(看護師・栄養士・薬剤師・理学療法士など)や製薬メーカー勤務の社会人、政策に携わっている社会人などがおり、その背景はより一層バラエティに富んでいる。授業によっては50人を超す参加者がいる授業もあり、他人の研究発表を聞くことで自分の気付かなかった問題意識や興味に触れることができ、医師以外の視点を考えることができる。

さらに様々な授業にグループワークやプレゼンテーションを行う機会が取り入れられている。受講者それぞれの背景が異なるため、どうすれば人に分かりやすく伝えられるのか、プレゼン内容や技法について学んだり、考えることなど、臨床をしていたときにはできなかったことを考え、見直すいい機会であった。

本コースで学ぶ内容は、臨床医としてベッドサイドで患者さんに向き合い、その治療に専念することとは大きく異なる。臨床試験の結果を個々の患者さんに適応できるのか、そこにどういった問題があるのか、またガイドラインの抱える問題点、あるいは臨床医が直接接することのない問題(医療経済、医薬品開発など)に対してどのように対策するかなど、患者個人だけでなく集団や社会としての医療を考えることができる。当然、自身の研究を進めることについて、いろいろなサポートが得られる点も大きなメリットである。

MCR コースの知名度はまだ低く、なかなか周りに実際の体験を聞いたり、進学について相談できることは少ないかもしれません。ただ、臨床の中で疑問を感じたり、臨床研究を考えているのであれば、本コースの存在に気付かれたのは幸せなことだと思います。ぜひ一度見学に来ていただき、受講者たちに会われることをお勧めしたいと思います。